

植物
防疫
講座

病害編-57

キウイフルーツに発生する病害の発生生態と防除について

香川県農業試験場 府中果樹研究所 き さき がん
生 咲 巖

はじめに

キウイフルーツは、中国原産の *Actinidia* (マタタビ) 属の植物で中国本土には 60 種以上が自生分布しており、亜寒帯や亜熱帯まで広く分布している。キウイフルーツが日本に本格的に普及し始めたのは 1980 年代ごろからであり、過剰生産に苦しむ西南暖地のミカン農家の転換作物として導入が進んだ。導入当初から現在に至るまで緑色系品種 (*A. delisiosa*) の‘ハイワード’の栽培が多いが、近年では黄色系・赤色系品種 (*A. chinensis*) の栽培も増えてきている。香川県ではキウイフルーツの県オリジナル品種の開発に力を入れており、健康志向、温暖化など嗜好や時代の変化に合わせて、それぞれの品種を少しずつ改良し続けている。

本稿では、香川県での事例を中心にキウイフルーツで問題となる病害についてその発生生態や防除について解説する。

I かいよう病

1 病徴と発生生態

かいよう病は細菌によって起こる病害で、1984 年に日本で初めて報告された (SERIZAWA et al., 1989; TAKIKAWA et al., 1989)。病原菌は *Pseudomonas syringae* pv. *actinidiae* で、病原性の異なる 5 系統 (biovar1, 2, 3, 5, 6) が存在している (CHAPMAN et al., 2012; 澤田ら, 2014; 2016)。

病徴として、枝幹部では、枝の萎凋・枯死 (図-1) および赤色または黄白色の粘質液の漏出 (図-2) が 2~4 月上旬ごろに確認でき、葉では不正形の褐色斑点 (図-3) が梅雨時期まで発生し、降雨等で葉表面が濡れている場合には発病部位からさらに細菌が溢出することがある。また、花蕾が腐敗することもある (図-4)。

病原菌の生育適温は 10~20℃ 程度であり、それ以上の高温では菌の増殖が抑制されたり、死滅したりするた



図-1 かいよう病による枝の萎凋・枯死



図-2 かいよう病による枝部から漏出している赤色の粘質液

め、樹体内の菌密度は秋季~春季に高いレベルとなり、夏季は菌密度の低下に伴い、病徴進展は抑制される。主な感染時期は発芽期から開花期まで (3月上旬ごろ~5月下旬ごろ) と収穫後から発芽前まで (11月中旬ごろ~2月ごろ) である。本病の主な感染経路は風雨による伝染、接触伝染および苗木伝染であり、剪定作業、風雨および雹害・凍害などによる葉や枝の傷口から細菌が侵入し、枝幹、新梢や葉等で被害が認められる。